



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ラッセル「記述の理論」は存在論的含意をもつか？
Author(s)	野村, 恭史; NOMURA, Yasushi
Citation	哲学, 55, 35-65
Issue Date	2021-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95623
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_t3.pdf



ラッセル「記述の理論」は存在論的含意をもつか？

野村 恭史

一 クワインの標準的解釈

ラッセルの哲学の展開において、確定記述句のとりあつかいについて転回があつたことはよく知られている。それは、『数学の原理』*The Principles of Mathematics* (一九〇三年、以下『原理』と略記)における表示概念の理論から「表示について」“On Denoting” (一九〇五年)における記述の理論への転回である。これについては、クワインの読みがその典型とされる「標準的」(といってよいであろう)解釈がある。それは、『原理』の存在論をきわめてリベラルなものとして特徴づけるところから出発する。

一九〇三年の『原理』では、ラッセルの存在論は抑制されていない。あらゆる語がなにかを指示する。それが固有名ならば、……その対象はもの・*thing*であり、そうでなければ、概念・*concept*である。かれは「存在」という語をものに限定している。……さらに存在 *existence* 以外にも、存在者 *entity* は残っている。「数、ホメロスの神々、関係、キマイラ、四次元空間」……注意すべき点は、ラッセルにとっては、神々とキマイラが数と同程度に実

在的だということ。さてこれは、耐えられないほどに無差別的な存在論である。(Quine 1966, p.4)

もちろんラッセルは、(その当否はともかく) しばしば「マイノング的」とも称されるこのきわめてリベラルな存在論にとどまったわけではなかった²⁰。かれは論文「表示について」で、いわゆる「記述の理論」による転回をおこなったとされる。

ところでクワインは、有名な論文「何があるのかについて」"On What There Is"のなかで、『原理』流のリベラルな存在論を奉じている架空の論理学者マックスとワイマンを登場させ、かれらの存在論が、ラッセルの記述の理論によつて切りつめられるというストーリーを語った。

われわれの議論は、いまやきわめて一般的なものである。「これこれのものはない」という形式の言明は、「これこれのもの」が単純なもしくは記述的な単称名詞のとき、そのこれこれのものがなく、有意義な仕方では肯定されない。マックスとワイマンは、このように仮定した。いまやこの仮定は、まったく一般的に根拠を欠いていると見られる。というのも、当該の単称名詞は、トリヴィアルな仕方であれそうではない仕方であれ、つねに単称記述へと拡張されることができ、それからラッセルの仕方でも分析されうるからである。(Quine 1948, pp.27-28)

この引用では、ラッセルの記述の理論は、「なにかが存在しない」という言明におけるそのなにかを指示する表現を消去することで、「当該の言明が有意義であるためには(存在しないといわれている) そのなにかが存在しなくて

はならない」という議論の根拠を掘り崩すものとされている。

じつさい記述の理論では、後に見るように、たとえば「現在のフランス王 the King of France」という確定記述句は、それを含む文の分析からは消去され、代わりに量子と変項と「(::は)現在のフランスで王位にある」といった述語のみが登場する。それによって、「現在のフランス王」という現実的に空な確定記述句を含む文は、その指示対象が存在せずとも意味となりうる。任意の確定記述句について同じことがいえるので、現実的に空な確定記述句を含む文の有意味性を確保するために、その指示対象の存在をなんらかの仕方で要請するといった必要は、もはやなくなる。このように記述の理論が存在論を切りつめるという解釈は、ほかにもJ・O・アームソン、D・ペアーズ、A・J・エアなどにも見られる (Strawson 1950, pp.321-324, Urnson 1956, pp.22-24, Pears 1967, pp.13-14, Gram 1970, pp.118-119, 134-135, Ayer 1972, pp.53-55)。

このように標準的解釈では、記述の理論によって存在論の切りつめがおこなわれるとされるが、それによって直接的に消去されるのは(『原理』の表示概念の理論における)表示概念なので、他方では結局、標準的解釈では、表示概念がなんらかの仕方で存在論を膨張させていると考えられていることになる。こうして標準的解釈のポイントは、以下のようにまとめられよう。(1.1) 記述の理論によって存在論の切りつめがおこなわれた。(1.2) 『原理』における存在論の膨張の大きな原因の一つは、表示概念の理論である⁽³⁾。

さて、以下ではまず、このい・ず・れ・も・が・誤・り・で・あ・る・こ・と・を・示・し・た・い。

二 記述の理論は切りつめない

まず、上記(一)「記述の理論によって存在論の切りつめがおこなわれた」の誤りを指摘したい。記述の理論は、じつは存在論の切りつめをおこないうるような理論ではないように思われる。これを見るために、『原理』の可能主義的な存在論のもとで記述の理論を展開してみたい。

『原理』の(可能主義的)存在論では、束縛「項」変項は「無制約的変項」とされ、その変域には、現実的存在者や抽象的存在者だけではなく、可能的存在者もまた含まれる。例文として、「ハリー・ポッターの両親を殺した者は、へビの言葉を解する」を考える。記述の理論によれば、確定記述句を含む任意の文が、それを含まない文へと書きかえられる。目下の例文の場合、確定記述句「ハリー・ポッターの両親を殺した者」は消去され、それに応じて表示概念へハリー・ポッターの両親を殺した者も消去される⁽⁴⁾。書きかえ結果を以下に示す。

↑ x (x はハリー・ポッターの両親を殺した者) ↓ y (y はハリー・ポッターの両親を殺した者) x はへビの言葉を解する

いまは可能主義的存在論を考えているので、束縛変項の変域には可能的存在者としての「ハリー・ポッターの両親を殺した者」、つまり「ヴォルデモート」が入っており⁽⁵⁾、しかもかれは(作中で)へビの言葉を解することになっているので、記述の理論による書きかえの結果として得られる上の文は、真となるだろう。

可能主義的存在論のもとでは、上の例のような現実には存在しないものについての文、とりわけ現実主義的存在論

のもとであればとうてい真になりそうもない多くの文が、記述の理論を適用してもなお、真でありつづける。記述の理論は、現実には存在しない存在者についての文を、ともするとことごとく偽とするようにも思われるが（標準的解釈では大方そう考えられているのではないだろうか）、そうしたことが可能なのは、記述の理論が現実主義的存在論のもとで展開されたときのみである。

こうなるのは、記述の理論が、たしかに表示句と表示概念を消去するにせよ、そのことが、表示対象の消去をも意味するわけではないからである。じつさい記述の理論そのものによつては、書きかえ結果に登場する束縛変項の変域をいじることは、いっさいできない。それゆえ、「存在論の切りつめ」が束縛変項の変域の切りつめを意味するときに限るならば、記述の理論そのものは、存在論の切りつめにはなんら寄与できない、といわねばならないように思われる。

三 表示概念の理論は膨張させない

つぎに、上記（一）『原理』における存在論の膨張の大きな原因の一つは、表示概念の理論である」が誤っていることを示したい。表示概念の理論によつて存在論が膨張させられるといったことは、そもそもありえないように思われる。これを見るために、こんどは、「表示について」の現実主義的存在論のもとで表示概念の理論を展開してみたい。

「表示について」の現実主義的存在論は、おおよそ、『原理』の「項」の存在論から（存在可能だが現実には存在しない）可能的存在者を除去することで得られる。可能的存在者はいずれも「項」ではないとすればよい。とりわけ、可能的存在者としての「ハリー・ポッターの両親を殺した者」は、「項」ではないとする。

さて、この現実主義的な存在論のもとで表示概念の理論を展開してみよう。例文としてやはり、「ハリー・ポッターの両親を殺した者は、ヘビの言葉を解する」を考えよう。まず、確定記述句「ハリー・ポッターの両親を殺した者」は、表示概念へハリー・ポッターの両親を殺した者」を意味するが、対象としての「ハリー・ポッターの両親を殺した者」は、目下の現実主義的存在論では「項」とはされていない（それゆえ、端的にない）ので、この表示概念は、結局なにも表示できない（cf. PoM, p.62）。それゆえ、ヴォルデモートはたしかに作中でヘビの言葉を解することになっているが、そう述べる当該の文は、目下の諸仮定のもとでは、表示概念の理論を適用してもなお、真とはならない。

こうなるのは、表示概念の理論が、たしかに表示句にたいして表示概念を供給しはするが、それが表示すべき表示対象までも供給できるわけではないからである（「或る男」「すべてのカブトムシ」といった量化的表示句についてはこのかぎりではない⁽⁶⁾）。それゆえ、「存在論」が束縛変項の変域を意味するとされるかぎり、表示概念の理論によって存在論が膨張させられるといったことは、いつさえないように思われる⁽⁷⁾。

四 プラトンの髭

第一節のクワインからの引用のなかに、「これ・これ・このものは存在しない」という言明は、そのこれこれのものがなにかぎり、有意義な仕方では肯定することはできない」という一節があった。クワインはこの議論を（「オッカムの剃刀」によって剃られるべき）「プラトンの髭 Plato's beard」とよんだが（Quine 1948, p.21）、このプラトンの髭の議論は、しばしば（ラッセル自身によっても）存在論を膨張させる論法として言及される（cf. PoM, p.449, MPD, p.84）。とくに標準的解釈では（クワインにおいてそうであるように）、表示概念の理論によってこのプラトンの髭の議論が

支持されているとみなされるが、はたしてそうだろうか。

表示概念の理論は、確定記述句「ハリー・ポッターの両親を殺した者」にたいして、たしかに表示概念へハリー・ポッターの両親を殺した者」を供給することで、当該の文の有意性を保証しはする。しかし、目下の現実主義的存在論のもとでは「ハリー・ポッターの両親を殺した者」は「項」ではない（端的にない）ので、表示概念へハリー・ポッターの両親を殺した者」は、結局なにも表示できない。

この場合、文「ハリー・ポッターの両親を殺した者は（じつさいには）存在しない」は、表示概念へハリー・ポッターの両親を殺した者」があることで意味となり、とはいえ表示対象「ハリー・ポッターの両親を殺した者」がないことで、全体としては真となるように思われる⁽⁸⁾。

このように表示概念の理論は、すくなくとも現実主義的存在論のもとでは、プラトンの髭の議論を支持しない。それはたしかに、表示概念を供給する（ことで文の有意性を保証してはくれる）ものの、表示対象の存在までも保証してくれるわけではない。「表示概念の理論＋現実主義的存在論」という理論的背景のもとでは、たとえこれ・これ・ものが存在しなくても、「これこれのものは存在しない」と有意味に（しかも真な仕方）語れることになる。

それゆえ、プラトンの髭の議論によつて存在論が膨張させられるその原因が、もっぱら表示概念の理論そのものにあると考えられるならば、それは誤っている（ラッセル自身がそう考えていた節もあるのだが（cf. PoM, p.449, MPD, p.84））。表示概念の理論は、それが表示対象までも供給するものではないという点で、存在論の膨張にはなら寄与できない。それゆえ、表示概念の理論が存在論の膨張の元凶だと考えられるとすれば、それは誤りだといわざるをえないように思われる。

五 橋頭堡

以上により示されたことを、ここでいったんまとめておきたい。第二節で、上記(1.1)「記述の理論によって存在論の切りつめがおこなわれた」が誤っていることを指摘した。第三節(および第四節)で、上記(1.2)『原理』における存在論の膨張の大きな原因の一つは、表示概念の理論である」が誤っていることを指摘した。

それゆえ以上により、つぎの二点が示された。(5.1) 記述の理論そのものは存在論を切りつめず、(5.2) 表示概念の理論そのものは存在論を膨張させない。これが意味するのは、存在論ということで、(通常そうであるように)束縛変項の変域が考えられるならば、記述の理論も表示概念の理論も、じつは存在論的含意をなんらもつていないということ。

六 存在論的錯視

以上では標準的解釈の批判に終始してきたが、この解釈は、これまで多くの論者たちによって支持されてきた。それはなぜか。わたしの考えでは、起こるべくして起こったいくつかの見誤りが重なって、かくも明敏なる論者たちの多くが、同じ存在論的錯視に捕えられたように思われる。とくに「記述の理論による存在論の切りつめ」という存在論的錯視には、いくつかの理由を指摘できる。

「記述の理論による存在論の切りつめ」には、二つの消去がかかっている。「現在のフランス王は存在しない」という例で考えよう。

(Elim1) 第一の消去・書きかえによる「意味」の消去　まず、文「現在のフランス王は存在しない」を記述の理論によって書きかえよう。

(6.1) 現在のフランス王は存在しない

(6.2) 「 $\exists x (x = \text{'} y \text{'})$ 」は現在のフランスで王位にある」

(6.3) 「 $\exists x \exists y (y \text{ は現在のフランスで王位にある} \ \& \ \forall z (z \text{ は現在のフランスで王位にある} \rightarrow z = y) \ \& \ x = y)$ 」⁽⁶⁾

このとき、確定記述句「現在のフランス王」、つまり (6.1) の「 $\text{' } y \text{'}$ 」は現在のフランスで王位にある」が、(6.3) で消去されることで、それに対応する表示概念〈現在のフランス王〉が消去される。これが第一の消去、「意味 meaning」の消去である。

(Elim2) 第二の消去：真偽の評価による「指示」の消去　書きかえ結果の (6.3) が真と評価されるさいに、当該の束縛変項「 x 」「 y 」「 z 」の変域には、当該の表示対象「現在のフランス王」が入っていないものとみなされ、消去されている。現実主義的存在論が採用されている、といってもよい。これが第二の消去、「指示 denotation」の消去である。

このように「記述の理論による存在論の切りつめ」には、二つの消去がかかわっている。この二つの消去、意味の消去と指示の消去にかんして、二つの見誤りを指摘できる。

(Mis1) 第一の見誤り：表示概念が表示対象と見誤られる。記述の理論により消去される表示概念〈現在のフランス王〉

が、「存在否定言明が真であるために指定されるなにか」であるかぎり、プラトンの髭の議論によって指定される可能的対象「現在のフランス王」と（誤って）重ね合わされ、書きかえによって消去されるものと誤認される。

しかしこの可能的対象は、確定記述句の指示対象（表示対象）であって、その意味（＝表示概念）ではなく、書きかえによって消去されるわけではまったくない。こうして、記述の理論による書きかえ、つまり表示概念の消去が、表示対象の消去、つまり存在論的切りつめだと見誤られる⁽⁸⁾。

(Mis2) 第二の見誤り：ほんとうの存在論的切りつめが、端的に見落とされる。存在論的切りつめ、つまり上記(Elim2)は、束縛変項が現実主義的に解釈されることでおこなわれる。（記述の理論の適用ではなく）こちらこそがほんとうの存在論的切りつめなのだが、それは、変項の現実主義的解釈があまりにも自然であるために、そのように解釈しているときにそうした切りつめがおこなわれているとは気づかれない。こうして、おこなわれているほんとうの切りつめが、たやすく見落とされる。

さて、上記の二つの見誤りが、二つの消去にかんして重なると、どうなるだろうか。まず、束縛変項の現実主義的解釈があまりにも自然なため、束縛変項の変域のほんとうの切りつめ(Elim2)が端的に見落とされるところで(Mis2)、誤って（マイノング的）表示対象とみなされた表示概念が(Mis1)、記述の理論による書きかえをつうじて消去されるので、この第一の消去(Elim1)のみによって存在論的切りつめがおこなわれたと見誤られる。このようにして「記述の理論は存在論を切りつめる」という存在論的錯視が生じるように思われる。

ここまで来ると、この存在論的錯視のいっそう深いメカニズムが見えてくるように思われる。まず重要なのは、舞台装置として現実主義的存在論が暗黙のうちに採用されていること。この舞台装置の何気なさ、ほんとうの存在論的切りつめをわれわれの注意から逃れさせる。そのうえで、舞台上では記述の理論という演劇が上演される。たとえ

ば確定記述句「現在のフランス王」を含むなんらかの文について、記述の理論は、以下のことをじっさいにおこなう：

(A) 当該の文の書きかえをつうじて、記述句「現在のフランス王」を解体する。

(B) それにより、表示概念〈現在のフランス王〉を消去する。

(C) この結果、当該の記述句にその指示対象「現在のフランス王」を割り当てる必要がなくなる。

上演はこれでおわりだが、観客は(C)のラスト・シーンのうちに、

(X) 対象「現在のフランス王」が存在論的に切りつめられる

を重ね見る。「現在のフランス王」は、目下の場合たしかに存在せず、切りつめられているのだが、それはもっぱら現実主義的存在論の採用によるのであって、記述の理論とは関係がない。しかし演劇を見たわれわれには、この切りつめがあたかも記述の理論によっておこなわれたかのように見える。これが存在論的錯視である。

錯視者は結局、(C)が(X)を含意するとみなしている。しかしこれは、控え目にいっても、不思議な推論である。

(INF1) 錯視者の推論：(C) 記述句「現在のフランス王」に指示対象を割り当てる必要はない、ゆえに、(X) 対象「現在のフランス王」は存在しない。

或る特定の記述句に指示対象を割り当てる必要が（記述の理論により）なくなることが、なぜその指示対象の非存在を含意すると考えられるのだろうか。（C）が純粹に意味論の問題である一方、（X）はフランスの政治制度の問題である。ほぼなんの関連もないのに、錯視者はなぜか、これら二つを重ね合わせる。

一般に、或る対象が存在するかどうかは、それを指示する単称名が存在するかどうかからは独立しているとはいえない。なにかを指示する単称名が解体されたからといって、当該の指示対象もまた消去されるなど考える者はいない。にもかかわらず、上記（NE）では、記述句「現在のフランス王」が解体されるだけで対象「現在のフランス王」もまた消去されるとごく自然に考えられているように見える。これは、いかにも不思議ではないだろうか。（C）が（X）を含意すると考えられるのは、錯視者が暗黙のうちに以下のように考えているからではないだろうか。

（ID1）錯視者の隠された考え…現実には存在しない対象「現在のフランス王」がもしかりに存在するとすれば、それは、記述句「現在のフランス王」に指示対象を割り当てる必要のゆえである。

現実には存在しない対象がもしかりに存在するとすれば、それはなんらかの意味論的要請によるのだ、という考えは、或る意味で自然であるようにも見える¹¹。というのも、「現在のフランス王」や「円い四角」などの現実には存在しない対象は、すでにいわば架空の対象であり、われわれが創作によって自由に存在させることができもするかのよう¹²に考えられようからである。

もちろん、現実存在する対象については、このように考える余地はない。

(ID2) 誤った考え…対象「日本一高い山」(＝富士山)が存在するのは、記述句「日本一高い山」に指示対象を割り当てる必要のゆえである。

富士山が存在するのは、日本列島の造山運動のゆえであって、一つの記述句に指示対象を割り当てる必要のゆえなどではもちろんない。これがばかげた考えであるかぎり、つぎの推論もばかげていよう。

(INF2) 誤った推論…記述句「日本一高い山」に指示対象を割り当てる必要はない、ゆえに、対象「日本一高い山」(＝富士山)は存在しない。

富士山が存在しないとすれば、それはやはり、(仮定上の)日本列島の造山運動のゆえなのであって、記述句にかんする意味論的考慮とは無関係であろう。ここには、非対称性がある。現実存在する対象と、存在しない対象とで、その「存在」の捉え方に大きなちがいがあ。そのちがいのゆえに、(INF2)(および(ID2))がばかげている一方、(INF1)(および(ID1))は、すくなくとも自然に見える。

こうして (ID1) (意味論的考慮による存在) が自然に見えるがゆえに、(INF1) (割り当て不要ゆえに非存在) が自然に見え、そこからわれわれは、(C) のラスト・シーンのうちに自然に (X) (指示対象の存在論的切りつめ) を重ね見る存在論的錯視に陥る。これが、標準的解釈における存在論的錯視の自然さの秘密であるように思われる。

(INF1) (および (ID1)) は、とはいえ、それがどんなに自然に見えるとしても、誤っている。(ID1) について：「現在のフランス王」がもしかりに存在するとすれば、それは、記述句「現在のフランス王」に指示対象を割り当てる

必要のゆえなどではなく、(仮定のうえでの) フランスの現在の政治制度のゆえであろう。(MEI) について：同様に、「現在のフランス王」が存在しないのは (X)、記述句「現在のフランス王」に指示対象を割り当てる必要が (記述の理論によつて) なくなつたこと (C) とは無関係であつて、むしろもつぱらフランスの現在の政治制度のゆえである。

このように、現実主義的存在論が暗黙のうちに採用されている場合、現実が存在しない対象については、それが架空の対象と類比的にあつかわれるというマジックに幻惑されて、それを指示する記述句が解体されるだけで、あたかもそれが存在しないと結論づけるのに十分だと思ひ誤られてしまう (MEI)。これが、件の存在論的錯視のいつさいう深いメカニズムである。他方、現実が存在する対象については、架空の対象との類比というマジックがいっさいはたらかないので、指示対象の割り当て要求のとりさが非存在を含意するなどというばかげた推論 (MEI) が妥当とみなされることはない。

七 あたらしい読み

以上、標準的解釈の誤りを指摘してきたが、この解釈には、もちろん正しいところもある。それは、この解釈によれば、存在論の転回がともかくもあつたとされる点である。表示概念の理論による存在論の膨張も、記述の理論による存在論の切りつめも、ともに存在論的錯視であつたと思われるにせよ、ラッセルの存在論はたしかに、『原理』のそれから「表示について」のそれへと転回している。ともかくもこのことを含意している点で、標準的解釈には正しいところもあるといえるように思われる。

これをとくに指摘したいと思うのは、転回があったというそのことを否定することが、近年のいわばトレンドになっているように見えるからである。以下、『原理』から「表示について」にいたるラッセルの存在論上の転回を否定するタイプの解釈を「あたらしい読み」とよんで、批判したい。

あたらしい読みの嚆矢は、N・グリフィンの『数学の原理』における表示概念であろう(Griffin 1996)。そしてそれを引き継いだG・ステイーヴンスの読みが、(その徹底性においても)その代表といえるように思われる(Stevens 2009, 2011⁽¹³⁾)。このタイプの読みの論旨は明快であり、それは以下の三つのテーゼにまとめられうる。(T1) 現実的に空な記述句が意味する表示概念は、結局なにも表示しない(できない)のだから、(T2)『原理』の存在論は、すでにして現実主義的である⁽¹⁴⁾。それゆえ、(T3)『原理』から「表示について」にいたるラッセルに、存在論の転回などはなかった(それゆえ、記述の理論の目的は、存在論の切りつめなどではない⁽¹⁵⁾)。

とはいえ、この議論は、問題なしとしない。さしあたり(T2)から(T3)への移行には、問題はないように思われる。むしろ問題は、(T1)および(T2)の主張のうちにある。まず確認すべきことは、(T1)と(T2)は論理的に等値だということ。これら両命題の真理値がくちがうことはありえない。すると『原理』においても、これら両命題がともに真かともに偽かのどちらかの可能性しかない。あたらしい読みでは、もちろん『原理』において両命題が真だと主張される。そのさいまず(T1)を確立したうえで、(論理的等値性を利用して)(T2)を確立するという手順を踏んでいるように思われる。

しかし、あたらしい読みで(T1)の確立が試みられるその仕方には、問題があるように思われる。あたらしい読みが(T1)を確立しようとするさいに依拠する四つの主な論拠(以下の(T11)～(T14))について、そのすべてがすくなくとも問題含みであることを指摘したい。

(7.11) しばしば、「任意の命題のすべての構成要素は直知されていなくてはならぬ」という直知の原理が (OD, p.56)、『原理』においてすでに仮定されているとされる (Stevens 2009, p.29, 2011, p.54, Kremer 1994, Hylton 2005, p.192, 高村 (二〇一三) 二三頁)。この場合、たんに可能なだけの存在者はもちろん直知されえないので、これから『原理』においても (7.1) が支持されているとされる。

しかし、この読みには無理があるように思われる。というのもラッセルは、『原理』で可能的存在者をもあきらかに「項」と認めており「項」が「思考されうるもの」と規定されていたことを想起せよ、可能的存在者の直知ということが問題にすらならないとすれば (cf. Hylton 2005, p.195)、『原理』では直知の原理は仮定されていないといわざるをえないだろうからである⁽⁹¹⁾。

(7.12) またしばしば、ラッセルが『原理』で言及している表示句の非表示条件を論拠に (7.1) を確立しようという試みがなされる。その非表示条件とは、

「クラス概念」 a と関連づけられた表示概念がなにも表示しないのは、x のすべての値について「x は a だ」が偽であるときそのときにかぎる

というものである (POM, p.74)。これを論拠に、たとえば「x は現在のフランス王だ」を充足する値は存在しないのだから、表示句「現在のフランス王 the present King of France」はなにも表示しない」と主張されることがある (Griffin 1996, pp.49-50, Stevens 2011, pp.57, 63-64)。

しかし、そもそも「x は現在のフランス王だ」を充足する値は存在しない」は、どのようにして確立されたのだ

ろうか。これが確立されているということは、「x」の変域に（現在のフランス王）のような「可能的存在者が入っていないこと、つまり『原理』の存在論が現実主義的だということ（(7.2)）がすでに確立されていることを意味しよう。ならばこの（7.2）は、どのようにして確立されたのか。あたらしい読みでは、それは、すでに述べたように、現実的に空な表示句がなにも表示しないこと（(7.1)）を論拠に確立されることになっている。これでは、循環という譏りを免れないだろう。

(7.13) ラッセルは、『原理』でこう述べている。

いまやわれわれは「*nothing* は *nothing* ではない」という命題を再検討できる。これは、あきらかに真な命題だが、注意深くあつかわなければ、見かけのうえで絶望的な二律背反の源泉となる。*nothing* は、*nothing* を表示する表示概念である。「なにかを」表示する概念はもちろん *nothing* ではない。つまりそれは、それ自身によって表示されるわけではない。かくもパラドクシカルに見えるこの命題は、つぎのこと以上を意味しない。*nothing*、表示概念としてのそれは、*nothing* ではない、つまりそれは、それ自身が表示するもの（「*nothing*」ではなく。（PoM, p.75）

G・ステイヴンスは、この箇所を論拠に、「もし */nothing/* がなにかを表示しなくてもよいならば、*/the present King of France/* も表示する必要はない」と述べている⁽⁷⁾（Stevens 2011, p.57, cf. Stevens 2009, p.28）。またN・グリフィン⁽⁸⁾は、「『(7.13)』ラッセルはあきらかに */nothing/* が表示するなんらかの項があることを意図してはいない」と述べている（Griffin 1996, p.55）。こうしてかれらは、『原理』のこの箇所を論拠に（7.1）を主張する。

しかしこの箇所は、ラッセルがそう述べているとおり、注意深くあつかわなければならない。じつさい、あたらしい読みにおけるこの箇所の上記の読みは、おそらくまちがっている。

まずは、量化的表示句にかんする表示概念の理論をごく簡単に思い出しておこう。たとえば「あらゆる人間はPである」における「あらゆる人間 every man (all men)」は、文字どおりあらゆる人間たちの「連言 conjunction」を表示し、このことは、任意の人間hについて「hはPである」が真ならばもの命題が真となる、⁽¹³⁾ということを意味する (PoM, p.57)。また「或る人間はPである」における「或る人間 a man (some men)」は、文字どおりあらゆる人間たちの「選言 disjunction」「和 sum」を表示し、このことは、すくなくとも一人の人間hについて「hはPである」が真ならばもの命題が真となる、⁽¹⁴⁾ということを意味する (PoM, pp.57-58)。

同じように、「いかなる人間もPではない」における「いかなる人間も……ない no man」は、あらゆる人間たちの否定連言 conjunction of negations を表示し、このことは、任意の人間hについて「hはPである」が偽ならばもの命題が真となる、⁽¹⁵⁾ということを意味することになる。

この理論で考えれば、「everything」は、あらゆる thing (＝もの) たちの連言を表示し、「something」は、あらゆる thing (＝もの) たちの選言を、「nothing」は、あらゆる thing (＝もの) たちの否定連言を表示することになる。以上のことを念頭に置きながら、上の引用を読み返してみよう。

「nothing is a denoting concept that denotes nothing」。じつじつわわわわわわわは、「nothing」は、なにも表示しない表示概念である」ではなく、「nothing」は、nothing「＝あらゆるものたちの否定連言」を表示する表示概念である」ではないだろうか。というのもラッセルは、この文につづけて、「表示する概念 [nothing] はもちろん nothing ではない。つまりそれ [nothing] は、それ自身によって表示される [nothing＝ものの否定連言である] わけではない」

と述べているからである。

nothing (＝ものの否定連言) を表示する *nothing* は、あくまでもそれを表示するのであって、それと同一なのではない。これらはまったくの別物であり、前者が後者を表示するという関係がなりたっている。したがって、ここでポイントは、あたらしい読みがそう考えたように、「*nothing* はなにも表示しない」ということではなく、それはむしろ、他の量化的表示概念とおなじように、ものの或る「結合体 combination」(PoM, pp.54-55) じつではものの否定連言としての *nothing* を表示する、ということであるように思われる⁽⁸¹⁾。

じつさい上の引用の最後の文は、それを明言している。表示概念としての *nothing* は、「*nothing* ではない、つまりそれは、それ自身が表示するもの what itself denotes [＝*nothing*] ではなく」と(傍点筆者)。ここでははっきりと、*nothing* が *nothing* を「表示する」と述べられている。とすれば、ここを論拠に (7.1) を確立することが、いかに的外れかがわかるだろう⁽⁸²⁾。

(7.14) またしばしば、『原理』のつぎの箇所が (7.1) の論拠として挙げられる (Griffin 1996, pp.48-49)。

「キマイラは動物だ」や「二以外の偶数の素数は数だ」といった命題を考察しよう。これらの命題は、真であるように見え、また表示概念ではなく、これらの概念が表示するものにかかわっているように見えるかもしれない。しかし、それは不可能である。というのも、当該の概念はなにも表示しないのだから。(PoM, p.73)

ここで、ラッセルはたしかに、概念「キマイラ」は「なにも表示しない」とはっきり述べている。しかし、同時にラッセルは、同書の別の箇所では、キマイラをはっきりと「項だ」といつてもいる (PoM, p.43)。キマイラが「項」ならば、

概念「キマイラ」はそれを表示するだろう。この点についてラッセルは、すくなくとも混乱しているといわざるをえない。ならば、そうした箇所を論拠になにかを（いわんや重要ななにかを）確立することは差し控えるべきだ、といわざるをえないように思われる。

このように、『原理』において (7.1) が支持されていることを確立するのは、たいへんむずかしい。上に見たかぎりでは、成功している議論は一つもないように思われる。それもそのはずで、(7.1) と等値な (7.2) については、『原理』ではその否定が明白に支持されていることを示唆する強力な証拠がいくつもある。もし (7.2) が偽なら (7.1) もまた偽であらざるをえないので、『原理』ではそもそも (7.1) もまた偽である可能性が非常に高い。

(7.2) の否定を支持する強力な証拠とは、ようするに、『原理』では可能主義的な存在論が採られていることを示すかなり明白な証拠である。『原理』における可能主義的な存在論とは、「項」の存在論にほかならない。

思想の対象となりうるもの、あるいは真もしくは偽であるような任意の命題に登場しうるもの、あるいは一つと数えられうるもの、わたしはそうしたものをなんであれ項 term とよぶ。これは、哲学的な語彙のなかでももっとも広いことばである。わたしはその同義語として、単位 unit、個体 individual、存在者 entity ということばを使う。最初の二つは、あらゆる項が一つだという事実を強調しているが、第二のことばは、あらゆる項が有 Being をもつこと、つまりそれがなんらかの意味で有という事実から引き出されている。或る人、或る瞬間、或る数、或るクラス、或る関係、或るキマイラ、その他の任意の言及されうるもの、これらはたしかに項である。そして、しかじかのものが項だということを否定するのは、つねに偽でなければならない。(PoM, p.43)

有 Being は、あらゆる把握可能な項に、思想のあらゆる可能な対象に属するものである。それはようするに、真

もしくは偽である任意の命題のなかにあらわれうるあらゆるもの、およびすべてのそうした命題それ自身に属する。有は、なんであれ数えられうるものに属する。もしAが一つと数えられうるなんらかの項ならば、Aがなにかであること、それゆえAがあることは、あきらかである。「Aはない *is not*」は、つねに偽か無意味でなくてはならない。というのも、もしAがなにものでもなければ、それがないとも語られえないから。「Aはない」は、その有が否定されている或る項があること、それゆえAがあることを含意している。こうして「Aはない」は、それが空虚な音でないかぎり、偽でなければならぬ。Aがなんであれ、それはたしかにある。(PoM, p.449)

ここでは、「項」の特徴づけとして「思想の対象となりうるもの」「把握可能なもの」「命題のなかにあらわれうるもの」が使われている。この特徴づけによつて、『原理』の存在論には、現実存在するもの（現存的存在者および抽象的存在者）のほかに、たんに可能なもの（可能的存在者）もまた含まれることになる。クワインがいささか呆れつつ指摘しているように、ラッセルにとつては、「数、ホメロスの神々、関係、キマイラ、四次元空間」、さらには「小説の疑似的現存者 *pseudo-existents of a novel*」(PoM, p.45) などをもまた「項」(「有をもつ存在者」)であつた。

このように (T2) があきらかに偽ならば、(T1) もまた偽であらざるをえない。『原理』では、現実的に空な表示句であつても、その表示対象が「項」であるかぎり、その表示対象を表示することになる。

以上により、(T1) を論拠に (T2) を主張するというあたらしい読みの方針には、大きな問題があることが示されたであらう。(T2) はあきらかに偽なので、それと論理的に等値な (T1) もまた（すくなくとも『原理』においては）偽であらざるをえない。(T2) が偽ならば、そこから (T3) へ移行することも当然で、それゆえ『原理』から「表示について」までに存在論の転回があつたことを否定するあたらしい読みの試みは失敗している、といわざ

るをえないように思われる⁽²²⁾。

思うにあたりしい読みは、表示概念の理論が可能主義的存在論を含意していないことに正しくも気づきながら、それゆえにそれが現実主義的存在論を含意していると思いつたように思われる⁽²³⁾。

八 存在論の転回

以上によりわれわれは、いささか微妙な立場に立たされている。まず示されたのは、記述の理論も表示概念の理論も存在論的含意をなんらもたない、ということ。それゆえ、表示概念の理論から記述の理論へというラッセルの顕在的な理論展開がそのまま、ラッセルの存在論の転回を示しているわけではないことがわかる。とはいえ、同時にわれわれは、ラッセルの存在論に転回などなかったとするあたらしい読みを批判した。ここから導かれるわれわれの立場は、表示概念の理論から記述の理論へという理論展開から独立になおラッセルの存在論には或る転回があった、というものとなる。ラッセルの存在論には或る転回があったが、それは顕在的な理論展開からは独立している⁽²⁴⁾。では、顕在的な理論展開から独立の存在論の転回とは、どのようなものだろうか。

まず、上に見たように、『原理』の「項」の存在論は、あきらかに(志向可能性にもついた)可能主義的な存在論であった(cf. Noonan 1996, p.72)。ラッセルはそのことを、たんに「思考可能なもの」も「有をもつ」項であるといういい方で明言していた。ここから見ると、『原理』の「項」の存在論を現実主義的なものとみなそうとするあたらしい読みの試みは、控えめにいつてもかなり無理があるといわざるをえないように思われる。

ともあれわれわれは、『原理』の存在論を(現実的存在者や抽象的存在者ばかりではなく可能的存在者をも含む)「思

考の対象」の存在論（＝「項」の存在論）とよぶことができるように思われる。なにかが「項」である、つまり「有」をもつものであるのは、われわれがそれを思考しうるときかつそのときにかぎる²⁵。これはたしかに、認識論的な制約がほとんど課されていない、（標準的解釈がいうように「耐えられない」ほどかどうかはともかく）「無差別的な」存在論だといえるように思われる。

では「表示について」の存在論は、どのようなものであったか。

「円い四角」「二以外の偶数の素数」「アポロン」「ハムレット」などのような非存在者 non-entity の全領域は、いまや満足できる仕方できつかわれうる。これらはすべて、なにも表示しない表示句である。（OD, p.54）われわれの表示の理論により、われわれはいかなる非実在的な個体 unreal individual もないと考えることができ²⁶。（OD, pp.54-55）

（81）これは、「円い四角」や「二以外の偶数の素数」のような不可能者も、「アポロン」や「ハムレット」のような可能的存在者も、あるいはじつさいには存在しない「非実在的な個体」も含まれないような存在論である。不可能な対象はもちろんのこと、可能ではあるがじつさいには存在しない対象も（具体的か抽象的かを問わず）いっさい含まないような、げんに存在するもの（＝「存在者 entity」）のみからなる存在論。これはまさに、現実主義的存在論である（＝「存在者」「実在的個体」の存在論）。大まかにいって、『原理』の可能主義的存在論から可能的存在者を除去した領域が「表示について」の対象領域となる。

ここからわれわれは、『原理』から「表示について」にいたるまでに、存在論の転回がたしかにあったと結論できる。

それは、可能主義的存在論から現実主義的存在論への転回（可能的存在者を含む存在論から含まない存在論への転回）である。しかもそれは（上に見たように）、表示概念の理論から記述の理論へとという顕在的な理論展開から独立している⁽⁸⁰⁾と結論できる。

(8.2)『原理』から「表示について」にいたるラッセルの草稿を検討してみると、存在論上のこの転回は、「表示について」と同時にではなく、それよりかなり早くに生じていることがわかる。それは『原理』刊行の直後、一九〇三年の後半に書かれたと思われる草稿のなかですでに確認できる（CP4, pp.285, 287）。とすれば、やはりこの転回は、顕在的な理論展開からは独立しているといえるように思われる。

(8.3) また、存在論の転回と並行して、「存在 existence」概念の転回がおこなわれていることにも注意すべきだろう。その転回とは、一階の述語としての「存在」から二階の述語としての「存在」への転回である⁽⁸¹⁾。

『原理』では「存在 existence」は、束縛変項の変域を画する「有 being」からは区別されて、一階の述語と考えられていた（PoM, pp.449-450）。じつさい可能的存在者をも含む「項」の領域の或る真部分を「存在」するものとして括りとるためには、「存在」はごく自然に一階の述語となるだろう。他方「表示について」では、げんに「存在」するもののみが「存在者」として束縛変項の変域を構成するので、「存在」は自然に量子子となる（この自然さが上記の見誤り（Mis2）を招いたように思われる）。

(8.4) やらにもう一点、注意すべきことがある。『プリンキピア・マテマティカ』以降に顕著となるラッセルの認識論的考慮への傾斜が「表示について」にすでにあらわれている。それは、命題の構成要素にかんする直知の原理である。

われわれが把握できるあらゆる命題（われわれがその真偽を判断できるような命題のみならず、われわれがそれ

について考えることのできるすべての命題)において、すべての構成要素は、われわれがじつさいに直接の直知 direct acquaintance をもつような存在者 entity にある。(OD, p.56)

この点に関連して、しばしば、認識論的考慮への傾斜が直知の原理をもたらし、それが現実主義的存在論をもたらした、と考えられることがある(上記(7.11)を参照のこと)。これは、たしかにもっともらしいのだが、誤っているように思われる。というのも、直知の原理からただちに現実主義的存在論が帰結するわけではないからである。

直知の原理はただ、直知可能性という制約を命題の構成要素に課すのみで⁽²⁸⁾、命題の構成要素がそこからとられる対象領域そのもの(ようするに存在論)には、なんら制約を課すものではない⁽²⁹⁾。だから直知の原理は、可能主義的存在論とともに採用することすらできる。

「表示について」のラッセルはむしろ、存在論との関連ではなく、記述の理論との関連で、つまりその「一つの興味深い結果」として直知の原理を導入している(OD, p.55)。記述の理論は、直知不可能な対象であっても、それを指示する記述句のすべての構成要素(の意味論的値)が直知可能ながぎりで(直知の原理)、そうした対象について語ることを可能にさせてくれる。記述の理論があれば、可能的存在者のような直知不可能な対象、あるいはじつさいに存在しても直知されないであろうような対象についても、そのすべての構成要素(の意味論的値)が直知可能であるような記述句を構成できるかぎりで、われわれは自由に語ることができる(「二〇世紀最初の瞬間における太陽系の質量中心」などはその例となろう)⁽³⁰⁾。

このように記述の理論は、たしかに、たとえ命題の理解をその構成要素の直知で説明したとしても(認識論的考慮)、直知可能ではない対象についての語りの可能性を保持してくれるという効用をもつ⁽³¹⁾。こうしたわけでラッセルは、

記述の理論の「興味深い結果」の一つとして直知の原理を導入したのだと思われる。

さて、以上からわれわれは、『原理』から「表示について」に至るまでに、ラッセルの存在論が或る仕方でしたかに「転回」していると結論できる。それは、「(思考の対象「項」の)可能主義的存在論から(「存在者」「実在的個体」の)現実主義的存在論への転回である。標準的解釈のように、表示概念の理論と記述の理論がそれぞれ別々の存在論を含意すると考えることも、またあたらしい読みのように、これら両理論がともに同じ現実主義的存在論を含意すると考えることも、ともに誤っている。真相は、表示概念の理論から記述の理論への転回から独立に(しかもそれより早くに)生じていた存在論の転回を、前者の転回がいつそう容易にした、ということであるように思われる。

九 結論

前半部分では、標準的解釈を批判するなかで、記述の理論も表示概念の理論も、存在論的含意をなんらもっていないことがあきらかにされた。後半部分では、とはいえ、ラッセルの(表示概念の理論から記述の理論へと)顕在的な理論展開に先立って、それから独立に、存在論の潜在的転回がおこなわれていたことが確認された³²。

註

- (1) D・A・グリフィスは、まさにこの読みを「標準的説明 standard explanation」とよんでゐる (Griffiths 1981, p.145)。
- (2) 『原理』の存在論は、たしかに「マイノング的」ではあるうが、いふまでもなくマイノングの対象理論 Gegenstandstheorie の枠組みと同じではない。これについては、稿を改めて検討したいと思つてゐる。
- (3) 「確定記述はいまや基本的言語の外側で定義されたので、確定記述の指示対象はもはや要請されない。それゆえ、それぞれの確定記述に或る存在者を仮定する『原理』の豊かな存在論は、もはや必要とされない。かれの初期の仕事の過度の実在論に、ラッセルがふたたび戻ることにはなかった」(D・ラッキー) (EA, p.96)。
- (4) 「A」によって、表示句「A」が意味する表示概念を示す。
- (5) 「A」によって、表示句「A」が指示する表示対象を示す。また本論文では、虚構の対象を(ラッセルにならつて) 現実には存在しない可能的存在者とみなしているが、これとはまったく別の仕方と考えられることもある (Kripke 2013, pp.26-28, 46-53)。
- (6) 「det」が量化的表示句ならば、これが意味する(量化的) 表示概念は、クラス概念 A の諸事例たちからなる(Aたちの「連言」や「選言」といった) なんらかの「項の結合体 combination of terms」を表示するとされる (POM, pp.54-55) (下記 (7.13) を参照のこと)。
- (7) 標準的解釈において「耐えられないほどに無差別的な存在論」が云々されるとき、それが「耐えられない」のは、現実には存在しない対象がその住人として認められているからで、そうした対象を表示する(あるいはそれがその事例となる)であろう概念の存在は、もちろん無害である。「円い四角」や「現在のフランス王」で考えてみられたい。
- (8) 現実的に空な表示句を含む存在否定文以外の文は、表示概念の理論(十現実主義的存在論)のもとでは、有意味ではあるものの真でも偽でもない、ということになるように思われる。たとえば「現在のフランス王は左利きである」を考えてみられたい。
- (9) ここでは記述句が「第二次的に」あらわれていると解釈している(第一次的にあらわれていると解釈すると「端的に矛盾する」。またこの(6)は、よりシンプルな「 $\lambda x \lambda y$ 」は現在のフランスで王位にある $x \times y$ は現在のフランスで王位にある $\lambda z \lambda y$)と論理的に等値である。
- (10) 「確定記述句を書き換えることが、それが指示するとされる対象が存在しないことを示すのに十分である」(Gram 1970, p.118)。
- (11) この考え (D11) は、本質的に「プラトンの髭」の議論である。この議論は、むしろマイノング(あるいは『原理』のラッセル)の枠組みを特徴づけるものであり、標準的解釈の支持者たちからすれば、まさに論敵の核心テーゼである。だがかれらは、本文中で見えるように、件の錯視者としてこの議論を支持してしまつてゐるように思われる。

- (12) J・O・アームソンが記述の理論を理解するその仕方は、わたしが本文中で述べた錯視者の歩みとかなりの程度一致している (Urmson 1956, pp.22-24)。
- (13) ほかに Makin 2000, 2009 など。
- (14) このテーゼ (72) にかぎれば、P・T・ギーチもそれを主張している (Geach 1958, p.211)。
- (15) このかぎりでは、P・ヒルトンも同じ考えである (Hylton 2005, pp.200-203)。
- (16) 「表示について」における直知については、下の (84) をも参照のこと。
- (17) 「A」は、表示句「A」が意味する表示概念を示す。
- (18) 『原理』の「表示 Denoting」の章では、「all」「every」「any」「a」「some」「the」のみがあつかわれており (PoM, pp.53-65)。「no (thing)」は別の箇所であつかわれている (PoM, p.75)。他方「表示について」では「no」「nothing」が「all」「every」「any」「a」「some」「the」などと同じ様な仕方であつかわれている (OD, pp.42-43)。
- (19) 飯田隆は、量化的表示句の表示対象(「項の結合体」)が一掃されたことを「表示について」の存在論的な成果として第一に挙げている(飯田 (一九八七) 一八二・一八三頁)。
- (20) このように、表示概念〈nothing〉がなにも表示しないといったことは無いということとは、上記(12)の表示句の非表示条件からもあきらかだろう (PoM, p.74)。とらうのもこの定義によれば、〈nothing〉がなにも表示しないのは、xのすべての値について「xはthingだ」が偽となるときそのときにかぎることになるが、この右辺はあきらかになりたないからである。
- (21) N・グリフィン は、はっきりと「項だ」といわれている(『原理』四三頁の「キマイラ」は、それが表示する対象ではなく、それが意味する概念を指示しているとしているが、これはかなり無理のある読みである(Griffin 1996, p.54)。
- (22) あたらしい読みは、このように『原理』の存在論を現実主義的なものとみなすことで、記述の理論が存在論の切りつめを目的として導入されたという見解を否定するのだが(e.g. Stevens 2009, p.27)。この後者の点については、わたしの考えと一致する。
- また、この点にかんするP・ヒルトンの読みは、おもしろい。かれによればラッセルは、表示概念の理論がマイノング的枠組みをブロックできていることに気づいていながら、(観念論の拒否のあと「極端な形式の実在論」へと傾向づけられていた)『原理』当時のかれにとっては、当該の枠組みが「welcome」だったので、かれはあえてそれをブロックしなかった、とされる(Hylton 2005, p.199)。
- (23) これは、G・ステイヴンスにとりわけよくあてはまるだろう(e.g. Stevens 2009, pp.27-28)。

(24) このかぎりでは、わたしの読みはヒルトンのそれと一致している (Hylton 1990, pp.240-242)。また中川大は、マイノングとラッセルの論争および記述の理論の展開を、存在論的コミットメントという問題設定から独立に理解しようとしている (中川 (二〇〇一))。また、記述の理論はたしかに空な確定記述句 (および同一性言明) のバズルを解決するが、それはかならずしも表示概念の理論から記述の理論への移行の理由ではない、と戸田山和久は指摘している (戸田山 (二〇〇七) 二二五頁)。

(25) この点からすると、『原理』の存在論は、思考可能性の存在論、志向性の存在論とみなしうるように思われる。あたらしい読みではこの点がしばしば見落とされる (あるいは無視される) のは、残念なことである (e.g. Makin 2009, pp.87-90)。

(26) では、なにがこの存在論の転回を駆動したのかについては、別稿を準備中である。

(27) ラッセルは、「表示について」の直前に書いた論文のなかで、「個体に述語づけられうるような」存在と、クラスについてそれが「すくなくとも一つのメンバーをもつ」ことを意味するような存在とを区別している (ELP, pp.98-99)。前者は、「哲学と日常生活にあらわれる」存在であり、後者は、「記号論理学において、定義可能で純粹にテクニカルな意味で使用される」存在だとされる (ibid.)。

(28) ラッセルはこれにより、命題の理解をその構成要素の直知で説明しようとする。

(29) この点については、Wahl 2007 から大きな示唆を得た。

(30) それゆえ「表示について」の存在論には、現実には存在しながらも直知されないような対象もまた含まれていよう。

(31) 記述の理論によれば、たとえその指示対象が存在しない場合でも確定記述句が意味をもちうる、ということをも D・ペアーズは強調している (Pears 1967, pp.14, 50)。この意味では記述の理論は、存在論的切りつめではなく、非存在者についての語りの可能性をもたらしけるといえる。

(32) 付記本論文の初期ヴァージョンは、二〇一九年三月三日に北海道大学 (人文・社会科学総合教育研究棟 5W09 室) で行われた「山田友幸教授ご退職記念ワークショップ」にて読まれた。このワークショップでは、わたしを含めて六名の山田門下の研究者たちが、山田先生のご退職を記念して発表し、最後の論文指導をしていただくとともに、先生の最終講義の露払いを務めさせていただいた。

山田先生の最終講義は、いうまでもなく大盛況で、大きな部屋ではあったが、文字どおり入りきらないほどの聴衆であふれた。最終講義といえば、在職中の自分の研究の全体を回顧的に概観するような講義がなされるのが普通なのかもしれないが、山田先生のそれは、いままお進展しつつある先生のご研究のまさに現在進行形の報告といったおもむきの、高度に専門的な内容のものであった。

本論文の主題であるラッセルの「記述の理論」は、もはや三十年近くまえに学部学生であったわたしを受けた山田先生の講義「哲学概論」で最初にあつかわれていた話題である。わたしはその講義ではじめて分析哲学というものに触れ、その切れ味の鋭さにいたく感動した。いまま手元に

あるその当時のノートのそこそこには、その感動の一端がなお色褪せずに書き込まれている。山田先生にはほんとうにお世話になりました。この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。

略号表

- Ayer, A. J., 1972: *Russell*, London: Fontana/Collins.
- CP4: *The Collected Papers of Bertrand Russell*, vol. 4, *Foundations of Logic, 1903-1905*, ed. by Alasdair Urquhart, London: Routledge, 1994.
- EA: B. Russell, *Essays in Analysis by Bertrand Russell*, ed. by D. Lackey, New York: Braziller, 1973.
- EIP: B. Russell, "The Existential Import of Propositions", 1905, in EA, pp.98-102.
- Geach, P. T., 1958: "Russell on Meaning and Denoting", *Analysis*, 19, 1958-59, Repr. in Klemke 1970, pp.209-212.
- Gram, M. S., 1970: "Ontology and the Theory of Descriptions", in Klemke 1970, pp.118-143.
- Griffin, Nicholas, 1996: "Denoting Concepts in the *Principles of Mathematics*", in Monk and Palmer 1996, pp.23-64.
- and Dale Jacquette (eds.), 2009: *Russell vs. Meinong*, London: Routledge.
- Griffiths, D. A., 1981: "A Reconsideration of Russell's Early Ontological Development", *The Philosophical Quarterly*, Vol. 31, No. 123 (Apr., 1981), pp. 145-152.
- Hylton, Peter, 1990: *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy*, Oxford: OUP.
- 2005: "The Theory of Descriptions", in his *Propositions, Functions and Analysis*, Oxford: OUP, 2005, pp.185-215.
- 飯田隆 (一九八七) 『言語哲学大全——論理と言語』(勁草書房)
- Klemke, E. D., (ed.), 1970: *Essays on Bertrand Russell*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Kremer, Michael, 1994: "The Argument of 'On Denoting'", *The Philosophical Review*, Vol. 103, No. 2 (Apr., 1994), pp. 249-297.
- Kripke, S. A., 2013: *Reference and Existence*, Oxford: OUP.
- LK: B. Russell, *Logic and Knowledge*, ed. by R. C. Marsh, London: Allen & Unwin, 1956.
- Makin, G., 2000: *The Metaphysicians of Meaning: Russell and Frege on Sense and Denotation*, London: Routledge.

- 2009. "On Denoting" Appearance and Reality", Griffin and Jacquette 2009, pp. 78-100.
- Monk, R. and A. Palmer (eds.) 1996, *Bertrand Russell and the Origins of Analytical Philosophy*, Bristol: Thoemmes Press.
- MPD: B. Russell, *My Philosophical Development*, London: George Allen and Unwin, 1959.
- 中川大 (二〇〇一) 「存在を否定するロジック——ベークレー——ラッセル論争とその後の覚え書き——」(北海道教育大学哲学倫理学会『哲学倫理学研究』第五号, 一—二頁)
- Noonan, Harold, 1996: "The 'Gray's Elegy' Argument - and Others" in Monk and Palmer 1996, pp.65-102.
- OD: B. Russell: "On Denoting", 1905, in LK, pp.41-56.
- Pears, D. F., 1967, *Bertrand Russell and the British Tradition in Philosophy*, London: Collins.
- PoM: Bertrand Russell, *The Principles of Mathematics*, London: Cambridge University Press, 1937 (1st ed., 1903) .
- Quine, W.V.O., 1948: "On What There Is", *The Review of Metaphysics*, vol.2, no.5, 1948, pp.21-38.
- 1966: "Russell's Ontological Development", in Klenke 1970, pp.3-14.
- Stevens, Graham, 2009: "Antirealism and the Theory of Descriptions", in Griffin and Jacquette 2009, pp.26-39.
- 2011: *The Theory of Descriptions: Russell and the Philosophy of Language*, New York: Palgrave Macmillan.
- Strawson, Peter F., 1950: "On Referring", *Mind*, 59, 1950, pp.320-344.
- 高村夏輝 (二〇一三) 『ラッセルの哲学「一九〇三—一九一八」センスズータ論の破壊と再生』(勁草書房)
- 戸田山和久 (二〇〇七) 「ラッセル」(『哲学の歴史十一 論理・数学・言語』中央公論新社, 一九七—二八〇頁)
- Urmson, J. O., 1956: *Philosophical Analysis, Its Development between the Two World War*, Oxford: OUP, 1956.
- Wahl, Russell, 2007: "On Denoting" and the Principle of Acquaintance", in Russell, n.s. 27, 2007, pp.7-23.